朝小読者 特別企画『言葉屋❹』
先取りお試し読み 掲載

「言葉屋」第4巻は書き下ろしで単行本になります。6月20日発売予定。お楽しみに！

言葉屋 ❹
おそろい心とすれちがいDNA

作・久米絵美里
絵・もとやままさこ

第一章　世代スキップ

言珠にも、DNAはあるのかもしれない。

詠子は最近、そう考えるようになった。

言珠とは、とんぼ玉の技術をもとにつくられた特別なお守りで、言いたくてもなかなか言えない言葉がある時に胸の前でにぎると、その言葉を口にする勇気をもらえる、まるいガラスの珠だ。どんな状況で、どんな言葉につかうかによって言珠の色は異なり、特に複雑な勇気が必要な言珠には、ベースとなる珠に別の色のガラスで模様がつけられることもある。言珠職人が、ベースの珠をくるくるとまわしながら、一色、二色と、その上に、溶けたガラスで水の流れのような線を描くのだ。

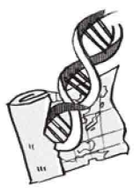
ある日、その言珠職人である詠子は、まさにその作業中、自分が描いた模様がDNAの二重らせん構造の図に似ていることに気がついた。

二本の線が平行に、等間隔にくるくると息をそろえてどこまでも続いていく姿。それは引っぱっても決してちぎれない頑丈な紐のようで、ひとっ飛びでどこへでもつれていってくれる強力なバネのようにも見える。

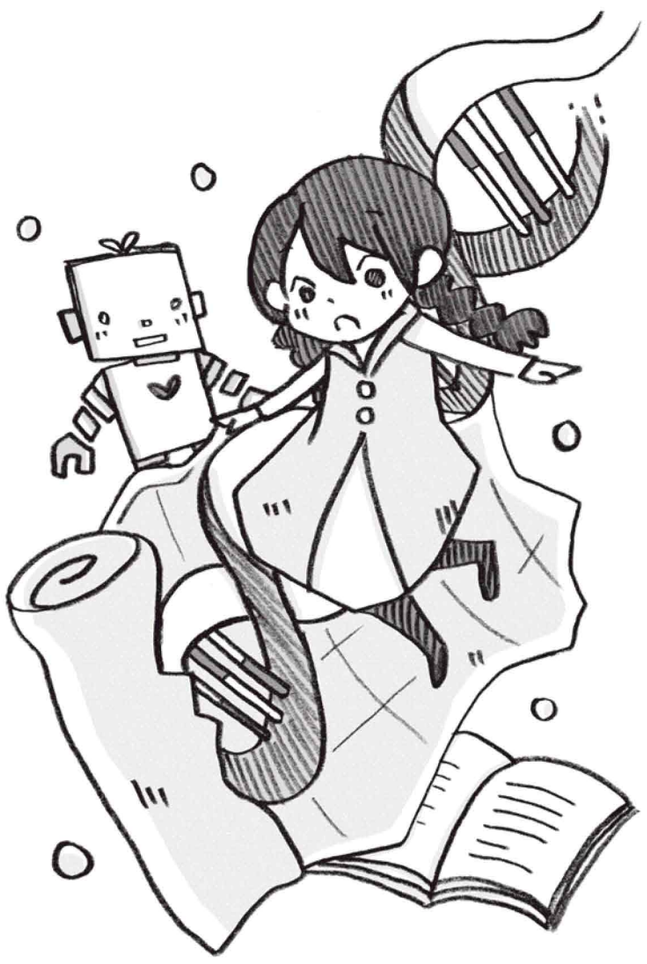
詠子は、DNAというものをくわしく知っているわけではなかったけれど、それが遺伝子の地図のようなもので、自分のものと似た地図がおばあちゃんの中にもお母さんの中にも巻きこまれていることは、なんとなく知っていた。

そして、それはお父さんの中にもある。

詠子には、昔からそれが少し不思議だった。



自分の地図は、お母さんの地図とお父さんの地図が合わさったもので、お父さんの地図はお母さんの中にはなく、お母さんの地図は、お父さんの中にはない。詠子はお父さんの地図にある道を歩くことができるけれど、同じ道をお母さんが歩くことはない。詠子はお父さんのことはほとんど知らず、お母さんと過ごしている時間の方がずっと多いというのに、おばあちゃんやおじさんから受けている影響の方が、ずっとずっと大きいというのに、それなのに自分には、ある日ふと、ほかのみんなが知らない道に足を踏み入れる可能性がある。詠子にはそれが少し不思議で、こわかった。



人の気持ちをつなげる言葉ってDNAといっしょ

しかし、言珠の中にDNAを見つけた日から、その気持ちは少しだけ落ちついた。

言珠は、つかい方さえまちがえなければ、強くやさしく、人の心の化身になれるものだ。その言珠にもDNAがあるのだとすれば、DNAは、決してこわいものではない。そう思えるようになった。

というのも、おばあちゃんから、言珠の成り立ちと使命を何度も何度も聞き、言珠職人としてその教えを体と心に染みこませてきた詠子には、言珠がどんなものなのか、よくわかっている。

言珠の材料は言箱。言箱は、吹きガラスの技術を応用してつくられた、涙のような葉っぱのような、羽根のようなかたちをした入れもので、その言箱を口にくわえ、言いたくても言ってはいけない言葉を口にすると、言葉は言箱の中にすいこまれる。そして、言箱をつかった人の心は、その言葉を口にした時と同じように軽くなるのだ。

この言箱を一定期間熟成させたあとに、専用の窯でとかし、リサイクルしたものが言珠だ。そして、その言珠は、一度つかうと言葉とともに人の心にとけ、いつか誰かがまた言箱をつかう時まで、人々の言葉の底を静かにただよい続ける。

つまり、言珠と言箱は、材料でつながっているだけではなく、人の気持ちをつなげているガラス色の糸でもある、と詠子はそう信じていた。何十年も前の人の「言いたい」をがまんしたやさしい気持ちが、今を生きる人々の「言おう」の勇気を支え、その勇気が、新しい未来をつくっていく。それはまるで、生きものが命をつなげていく過程のようで、まさにDNAのような見えない糸だ。

だからきっと、DNAは言葉といっしょ。つかい方さえまちがえなければ、きっと、こわくない。

きっと、きっと。

詠子はその日も、自分の心にそう言い聞かせながら、言葉屋工房の片づけを終えると、晴れやかな気持ちで、工房の外に出た。そのまま、帰路につく。

今日は、家に誰もいない日だ。

お母さんは夜遅くまでお仕事で、確か帰りは十一時を過ぎると言っていた。おじさんはおじさんで、しめきり間際だ。きっとトイレに行く間も惜しんで、屋上の掘っ立て小屋で、原稿にかじりついているにちがいない。

となれば、今夜はきっと、このまま長くひとり。

詠子は携帯で、無事に家についたことを知らせるメッセージをおばあちゃんに入れると、こんな夜の決まったコースに足を踏み入れた。

お風呂にお湯をためている間に、明日の準備。

明日のことを何も心配しなくていいように、入念に持ちものを確認しておく。次の日が平日ならば、教科書ノート体操着。特別な持ちものはなかったか、誰かに貸してと言われているものはなかったか、明日、自分は授業で指されそうかどうか、直近の事務的な心配ごとをひとつひとつ確認しながら、かばんの中にしまっていく。休日ならば、予定の確認をして、その予定にぴったりの持ちものを、おでかけ用のかばんに選び入れる。

そうして、「明日」が全部きれいにかばんにおさまると、詠子はお風呂に入った。

詠子はよほどのことがないかぎり、携帯も本もお風呂には持ちこまない。そのための今の準備だった。友だちからのメッセージに、アプリのプッシュ通知、ニュース速報に、気になる音楽や動画。今はどこにいてもいろいろな情報が目に、頭に飛びこんでくる。脳をそんな情報たちから解放してあげられるのはお風呂の中くらいで、だからこそ、詠子はお風呂の前に明日の準備を終わらせる。せっかくの解放タイムを、こまごまとした心配ごとに食べられてしまっては、脳がかわいそうだ。お風呂の時くらい、脳に羽をのばしてもらいたかった。

たとえば、せっかく水の中にいるのだから、首長竜になって太古の湖を泳ぐことを考える。どんな意識を持てば、何十メートルもうしろにあるしっぽの先が、気づかぬうちに貴重な古代魚の頬をピンタしないで済むのか。はたまたある日突然、人魚になった場合、どこで髪飾り用の貝殻を調達すれば、人魚界で浮かないか。そんな、ちょっとばかり馬鹿げたことを考えても、家には誰もいないのだから、恥ずかしくなんてない。お母さんやおじさんが実は、詠子の頭の中を読めてしまう超能力者だったとしても、さすがに家の外からの交信は難しいだろうと、根拠のない自信があった。

そうして、脳を休ませたのか、混乱させたのかよくわからない時間を過ごして満足すると、詠子はお風呂を出て、お母さんの部屋に向かった。

いつもならば、髪をかわかしたあとは、すぐにベッドにもぐりこんで、本を読んでから眠る。しかし、今日は特別コースだ。

お母さんの部屋には、お母さんの仕事用のパソコンと私用のパソコン、ふたつのパソコンがある。私用の方は、詠子もいつでもつかってよいと言われていて、お母さんがいる時につかっても、怒られはしない。

とはいえ、お母さんが家にいる時に詠子がパソコンをつかうことはあまりなかった。急にお母さんにうしろから画面をのぞきこまれたら、と思うと落ちついてつかっていられないのだ。別にやましいことをしていなくても、携帯の何倍も大きいそのスクリーンに自分の作業内容が映し出されていると、それこそ脳内を丸裸にされているようで気恥ずかしくなる。というのも、詠子がパソコンをつかってする主な作業は、メールチェックなのだ。

去年の年末に、初めてつくった自分用のメールアドレス。

そのアドレスを知っている人は限られていて、定期的にメールを送ってくれる人は、ひとりしかいない。

今は、ちがう中学になってしまった、小学校の同級生。

桐谷伊織くんは、詠子の唯一の読書友だちだった。

（つづく）

このつづきは単行本でどうぞ！

これまでのお話

言葉屋　言箱と言珠のひみつ（第1巻）

小学5年生の詠子のおばあちゃんのお仕事は、町の小さな雑貨屋さん。……と思いきや、本業は、「言葉を口にする勇気」と「言葉を口にしない勇気」を提供するお店、言葉屋だった！　言葉屋の成り立ちと使命を知ることとなった詠子は、その夏、言珠職人の見習いとして、おばあちゃんの工房に入門する――。

言葉屋❷ ことのは薬箱のつくり方

詠子は、言葉屋の修行をはじめたばかりの小学6年生。元気に言珠づくりにはげむ毎日は、いつも不思議でいっぱい。言珠の材料である言箱のじょうずな見分け方とは？　犬にも言葉がある？「大人の悪口」病って、どんな病気？　心の痛みはどんな言葉なら伝えられる？　翻訳と通訳って同じじゃないの？

いよいよ、言珠と言箱が活躍をはじめます！

言葉屋❸ 名前泥棒と論理魔法

言葉屋のたまごの詠子もとうとう中学生！　初めての制服に、変わっていく人間関係。「新しいものパレード」の中で、もみくしゃにされている詠子のもとには、謎の転校生まで現れて……。言葉で解決できることと、できないこと、その壁にぶつかりながらも、今日も詠子は、言葉屋修行にはげみます。

著者　久米　絵美里
1987年、東京都生まれ。慶應義塾大学法学部政治学科卒。「言葉屋」で第5回朝日学生新聞社児童文学賞を受賞、『言葉屋　言箱と言珠のひみつ』でデビュー。

絵　もとやままさこ
1982年、神奈川県生まれ。武蔵野女子大学文学部日本語日本文学科卒。イラスト・書籍の挿絵などで活動。主な作品に詩集『夏の日』（銀の鈴社）など。

言葉の大切さ伝える物語
中学校生活も落ちついてきた詠子。
自分や身近な人たちの内面と向き合う
きっかけと立て続けに出あいます。
お母さんはなぜ言葉屋にならなかったの？
進化する技術に必要な心の種。
本当の恋の色は？
お別れに必要な言珠とは……
定価 本体1,100円＋税
978-4-909064-12-7

言葉屋 ❹ おそろい心とすれちがいDNA
久米絵美里 作　もとやままさこ 絵

言葉屋って「言葉を口にする勇気」と「言葉を口にしない勇気」を提供するお店だよ

「言葉屋」シリーズ第4巻 6/20 いよいよ発売！
累計2万5千部突破の人気作
第1巻 言箱と言珠のひみつ
言葉屋って なに？
※入試・模試の問題に引用多数
定価 本体1,000円＋税
第2巻 ❷ことのは薬箱のつくり方
言葉は毒にも薬にも！
定価 本体1,100円＋税
第3巻 ❸名前泥棒と論理魔法
伝え方に正解はない
定価 本体1,100円＋税

お近くの書店かASA（朝日新聞販売所）、またはインターネット書店でお求めください。

朝日学生新聞社　www.asagaku.jp
お問い合わせは出版部 TEL 03-3545-5436（月～金 10：00～18：00）